

汲古一心

「占卜と万葉の歌」

中村素堂

これの最も簡潔に煮つめたものが、「一富士二鷹三茄子」という標語めいた夢占いの吉の番付であろう。富士の夢は大々吉、二番目が鷹の夢、その次の吉が茄子の夢というわけ。夢で胸さわぎがするなどというのも、妙に神秘的に暗示のようなものと通じて占いに近づけている。

夢の歌が古歌の中に多くあるわけもこんなことであろうが、しかしこれが占いのようなものとして歌われたのはなぜかあまり沢山はない。大伴家持が逃がした鷹を非常にほしがっていたところ、夢に乙女があらわれて、二日乃至七日のうちに還ってくるであろうと告げたので、感悦して作ったという大変長い長歌に短歌が四首ついたのである。

(前略)との曇り、雨の降る日を、鳥狩すと、名のみをのりて、三島野を、そがひに見つつ、二山の、上飛び越えて、雲がくり、翔り去にきと(中略)吾が待つ時に、娘子らが、夢に告ぐらく、汝が恋ふる、その秀つ鷹は、(中略)近くあらば、今二日だみ、遠くあらば、七日のうちは、過ぎめやも、来なむ吾兄子、ねもころに、な恋ひそよこぞ、夢に告げつる。(四〇一一)

この鷹は果たして還つて来たかどうか、これは占ったというよりも、いわゆる神託といったもので、進んで夢占いに問うたのではないから、正確に占いというには多少躊躇を感じるが、ただ今日でも、この系統のことが夢占いとなつて、かなり多くの人々に一種の占いをしてはいることは疑いない。

神託がかったものを占いとして見るとすれば、まだ琴占いというものもあるが、神がかりの範囲であろうと思われるので、先賢の意見を排して占いとは見たくない。

雑占系のもは、まだないこともないが、この辺で一応正占の範囲に属するもので、しかもその占いの内容が個人の私行について占つたものを読んでみたい。

『徒然草』で知らぬ人の兼好法師は、その前身の滝口の武士であつたり、また六位の藏人であつたりした時分には、卜部という姓であつたことも人のよく知っているところである。この姓の家は往古陰陽寮に仕えて、占卜を専門としていた人々であるというが、たしかには『万葉集』の中にも占術専門の家として登場してくる。またこのころの陰陽寮の長官、すなわち陰陽頭として津守という姓の人もいたがこれも歌の中に出てくる人である。

このように占卜の職業人が、官吏として中央行政庁にいたことは、当時の占卜、ことに正占系の占いが大きく人心を支配していたことを物語るものに外ならない。〔たかむら〕昭和五十七年三・五月

貞香廬偶拈
昭和三十二年三月廿日
清晨掃几賞心幽鎮日臨池夕
未休入夜簷端風鐸默踈梅
寒月思悠悠

貞香山房詩鈔「貞香廬偶拈」